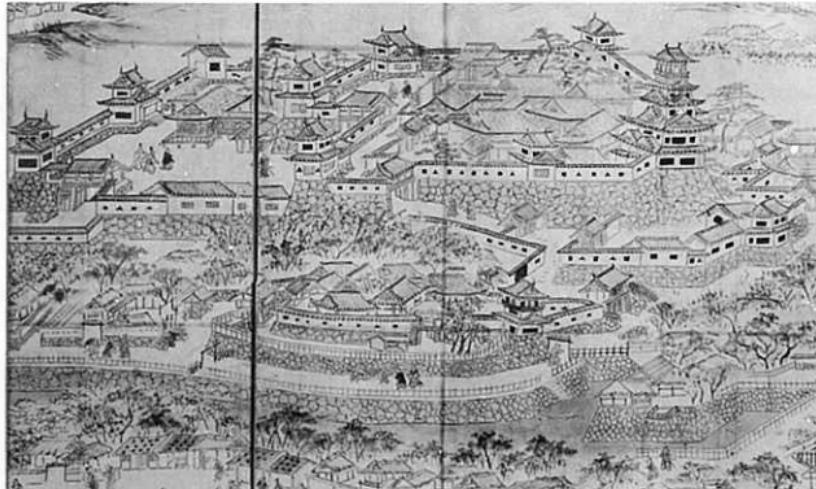


No. 3

博物館報

50.6.25



肥前名護屋城図屏風（部分）

写真説明……豊臣秀吉が文禄・慶長の両役の本營として築城した肥前名護屋城は、天正19年（1591）10月に工を起し、翌年の春に完成した平山城である。城の周囲の山野には、全国の諸侯の陣屋が設けられ、城下には城下町が形成されて盛況を呈した。しかし、秀吉の没後、廢城となり、島原の乱に際し石垣の主要部分が破壊されて荒城と化してしまった。この名護屋城の往時をしのぶにたる現在唯一の貴重な資料がこの名護屋城図屏風である。五層の天守閣をはじめ、石垣にめぐらされた角櫓や堀などの堅固な構造に近世城郭の完成された姿がしのばれ、城郭内に設けられている能舞台は秀吉の趣好の一面を物語るものとして注目される。また、城下町の商家や名護屋溝に浮かぶ安宅船なども当時を知る貴重な資料である。この図は名護屋城の対岸にある加都島を主要視点として、名護屋城を中心にしてその周囲に展開する城下町や陣屋などを鳥瞰図式に描写したものであって、紙本に淡彩が施され描寫は細密である。屏風の貼付に、「肥前名護屋図、板倉」と墨書きされているところから、この図は元禄元年に亀山城主板倉重常が幕府へ献上したといわれる「肥前名護屋城図」の屏風の下絵で、筆者は狩野光信であろうと推定されている。

目 次

肥前名護屋城図屏風	1
野鳥屋から	2
大友弾生遺跡の装身具	3
円鑑禪師座像	4
肥前国産物図考（その2）	5
近代洋画壇に活躍した人々（その2）	6
鍋島藩窯について	7
特別展紹介	8・9
博物館日誌、お知らせ	10

野鳥展から

毎年全国的に実施される愛鳥週間行事の一環として、野鳥に親しみをもち、野鳥保護思想の普及のため開催した。

展示物は野鳥の解説パネル、野鳥保護関係資料30点、野鳥生態写真49点、剥製野鳥標本 131点、合計 210点であった。

200平方メートルの中展示室一ぱいに、たえず美しい「野鳥の歌」の録音が放送されているなかに、野鳥に親しみ、興味をもった人達が10日間で3200名に達した。近年いろいろの公害問題と自然保護の必要性が、大きな社会問題となっているためだろうか、予想以上の入場者数であった。福岡、長崎県からも数名の見学者があつた。



(オオワシの標本)

展示物にはとくに、動きの早い野鳥の姿を、シャッターチャンスでとらえた芸術作品に近い、いろいろの生態写真や、つぎに解説するオオワシ、ツルクイナの剥製標本には観覧者の注目をあつめていた。

オオワシ

Haliaeetus pelagicus (PALLAS)

北海道より北の地方で繁殖する。日本では最強の野鳥で、冬鳥としてやってくるが、本州以南では極めて少い。動物食で、魚類(サケ、マス)、俄類(ウサギ、イタチ、テン)、鳥類(カラス、カモ、アホウドリ)



(野鳥展風景)

ライチョウなどを持つ。動物の腐肉もよろこんでたべる。

この写真的標本は、昭和6年12月、佐賀郡川副町大井道の堤防の松の大木の頂で、カモの肉を引き裂いてたべていたものを受け取った人が捕殺し、当時の佐賀師範学校へ提供した。理科担当の関谷團英教諭が剥製に加工したもの。その数年後にも北川副でシラサギを捕食していたオオワシが捕えられたことがある。

このように戦前には、有明海のガンカモ、サギ、シギなどの水鳥を追って飛来したものと思われる。この標本は嘴長70ミリ、嘴巾50ミリ、翼長 620ミリ、尾長 350ミリ、全長 870ミリで、メスだといわれ、ガラスの眼玉もなく、成形した形もくずれているが、県内野鳥を知るための貴重な資料である。現在、佐賀大学教育学部に保管されている。

ツルクイナ

Gallinex cinerea (GMELIN)

日本では、まれにしかみられないクイナの一種。湖沼、河畔のヨシ、アシ、イグサ、カヤなどの草むらや、水田に生息する。昼間はなかなか姿をみせないが、朝夕、曇天の日には水辺で活動することがある。繁殖期にはグゥー、グゥー、グゥーとくりかえしてなき、時にはツツ、ツツ、ツツまたはコツ、コツ、コツとなることもある。普通10月から5月までにみかけられるが、本州でも6月に捕獲された例もある。

日本唯一の繁殖例として、昭和25年8月2日、神埼郡千代田村で、4株のイネをよせて、その上に皿状の巣をつくり、4卵があるのを、神埼高校生が採取し、谷口一夫氏(現鳥栖高校長)へ提出した。同氏が研究し調査された結果、「日本最初のツルクイナ繁殖例の確認」であることがわかり、現在、巣と卵は、東京都渋谷区南平台、山階鳥類研究所に保存されている。

展示された剥製標本は当館が所有するもので、翼長 160ミリ、尾長80ミリ、全長 290ミリ。昭和42年秋、嘉瀬川堤防において入手したもの。

(学芸課 手塚 静雄)

資料紹介①

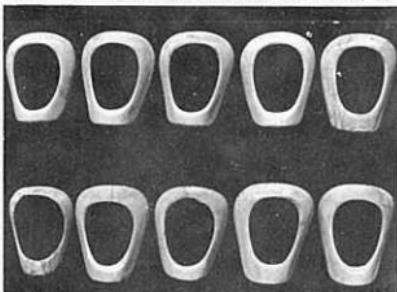
大友弥生遺跡の装身具

— 東松浦郡呼子町大友所在 —

弥生時代における大陸文化移入の門戸であったと思われる末永國の存在が、中国の史書に記されており、その末永國の一部であったと思われる呼子町大友弥生遺跡から、墓地の遺構と共に多數の人骨が発見された。

遺跡は唐津市の中心部から西方へ10kmの東松浦郡呼子町大友字畠田9017の1に位置し、土器崎と友崎を結ぶ弧状の海岸線2kmの砂浜の中央部砂丘に広がる。昭和43年11月に地元中学生のカメ棺片の発見によってこの遺跡は注目を集められた。

こうして昭和43年11月に3回、同年12月に1回、翌

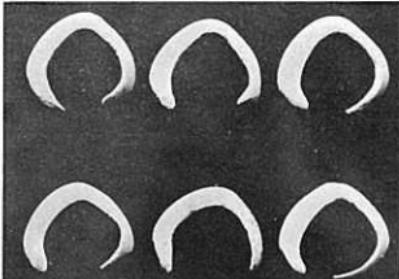


(スイジ貝製貝釧)

年1月に3回の予備調査がおこなわれ、弥生時代全期間にまたがるカメ棺・配石・箱式石棺等を伴なう一大墓地であることが確認され、昭和44年8月4日から8月12日までの9日間発掘調査が実施された。

発掘調査は予備調査時のトレントと接して平行に、東西に3m×10mと10m×30mのトレントを設け、発掘調査面積は240m²におよんだ。土層は基盤に至るまで砂質土層で、現在の地表面から70cm掘り下げるとき、玄海の荒波によって浸食された玄武岩の丸石が散在し、その下15cmの深さで一面に遺構と人骨が出土する。

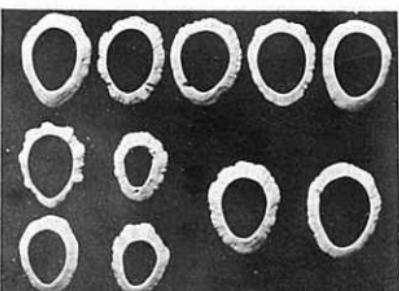
予備調査、第一次発掘調査の結果遺構として、カメ棺24基、配石墓25基、敷石墓15基、石垣墓14基、土壙墓21基が発見され、一大集団墓地であることが確認された。



(イモガイ貝製貝釧)

これら99基の遺構から出された人骨は総計84体で内男子31体、女子23体が判明でき、当遺跡の代表的な装身具である貝釧を装着している人骨は女子11体、男子はわずか1体である。人骨に装着されている装身具は貝釧46個、管玉37個、ガラス玉2個と巻貝の上下を切断し、これを磨いて胸飾りに使用したものと思われる装身具が肋骨の附近から一点出土している。

当遺跡の46個の貝釧の内、イモ貝製18個、スイジ貝製6個、オオツタノハ貝製22個が出土した。その中でも予備調査時に発見され、弥生時代前半に位置づけられるカメ棺に埋葬されていた、50才代の女性人骨の右腕に9個、左腕に1個装着されているイモ貝製の貝は、その姿が優美であり、保存状況も良好な優品である。



(オオツタノハ製貝釧)

これらの装身具の貝は近海には生息せず、南海に生息するところからこの大友人は、広く海洋に進出した部族であったと思われる。紀元前後ころ、この末永國の大友部落は農耕を基盤とする生産共同体ではなく、海洋を生活基盤とする共同体であったとも思われる。

(学芸課 森 酷一朗)

資料紹介②

円鑑禪師坐像

重要文化財

——大和町高城寺——

臨済宗東福寺派に属する高城寺は、肥前国分寺の北方約1キロ、筑紫山系南山麓の小高い丘に囲まれた清閑な地、佐賀郡大和町久池井に在る。

この寺は、文永七年(1270)、時の執権北条時宗が山林敷地を寄贈し、久池井の地頭国分次郎忠俊によって建立されたものである。正安二年(1300)には鎌倉幕府の関東祈禱所となり、元弘三年(1333)には後醍醐天皇の勅願寺となつた。肥前においては格式の高い寺院の一つであった。しかし、南北朝の争乱、ついで戦国時代の戦火にあい衰微の一途をたどるのであるが、文治二年(1186)八月四日付の源頼朝下文案をはじめとする103通にのぼる高城寺文書は、この寺院のかつての隆盛の模様を物語るものである。

この高城寺の開山が円鑑禪師であって、禪師は京都五山の一つである東福寺(1236年創立)の開山である円爾弁円(聖一国師)の法弟、藏山順空和尚その人であって、のち正安二年(1300)には東福寺に請ぜられて第六世の住持となり、延慶元年(1308)に遷化されている。

この円鑑禪師像は頭頂から身底までの高さが85cmである。曲录(きょくろく)に倚坐した禪師像は、写実的な手法によってその顔や姿を造り出してあり、いかにも鎌倉時代特有の肖像彫刻の様相がじみでている。

この像の造立銘はないが、頭部の内側から措写の宝鏡印陀羅尼と般若心経に添えられた正安二年八月と九月付の2通の願文が発見されており、禪師はこの年68才であって、この像が禪師晩年の悠容迫らざる温容さをいかんなく写し出しているところから、禪師が生存中の正安二年頃に製作されたと推定される寿像である。

やや下向きに開いた眼、厳しさを内に秘めた悟道に徹した慈眼であり、大きな耳朶、自然にひきしまった口許などに在りし日の禪師の人柄が忍ばれる面相である。

法衣をまとい、両臂を屈して膝上に安じ、裳を長く前に垂れ下げて坐した姿勢の様式で、法衣の線はかなり形式的な整え方ではあるが、面貌との調和がよく整えられていてすきのない形相である。

この像は、玉眼をはめた桧木造であって、内削



(円鑑禪師坐像重要文化財)

を施している。また、素地の上に布を貼り、その上に彩色が施されているが、一部に剥落のあとがみられる。

鎌倉時代は、禅宗の祖師崇拜のための頂相を作ることが流行したため、肖像彫刻を盛行させた。この円鑑禪師坐像もその作例の一つであって、数ある鎌倉時代の肖像彫刻の中でも秀れた代表的作例の一つであり、重要文化財に指定されている。



(高城寺の開基である国分次郎忠俊の供養塔と
伝えられている2メートルをこえる五輪塔)

資料紹介 3

肥前国産物図考 一その2—

第4帖 獲 鯨 図

肥前国産物図考8帖の中、質量ともに最大の力作とされているのがこの第4帖である。これは小川島を中心とした捕鯨に関する絵図で、原本は安永2年(1772)に書かれ唐津領での物産圖に関する一連の著作の中、最初に筆を取ったものであろうといわれている。もともとこの4帖は「獲鯨図説」「小兒の弄鯨一件の巻」として単本であったらしい。後年多くの捕鯨関係の絵巻の原本となっているし、また甚だしきはこの一部をそのまま転記した捕鯨図さえあるといわれている。

著者木崎教軒は軍師として領内を巡回中たまたま玄海の離島の小川島で捕鯨の実況をみ、その勇猛果敢な漁夫たちの姿に驚嘆しうさにその情景を書きおこために筆をとったことであろう。巻頭の「小兒の弄鯨一件の巻序」にその状況について「…相図の苦引上れば山上の羽指嶮々走り下り山下の水主鎧ヲおろし纏を解く…勢子船の先掛を争て波上ヲ走らするハ恰も平地逆行がごとし…二の鈎の前後ヲ競フハ車船ニ異ならず、煙波見るのみ紅に変しるしの小はたハ浦々せに翻り鯨勢殺活目前ニあり渚を見れば切端たる肉黑白黄赤散乱し血沙汀に漲り磯辺ニただよふ、真砂ハ朱ニ染て秋ならぬ紅葉ノ散敷かと疑ふ…。」と。安政期にさかのぼりこの図説の前半にみる捕鯨の実況を以下要約してみよう。

小川島は呼子から三里の海中にあり、東西百間、南北五百間の島で人家は80軒余、人数400人余で島の西側に鯨の山見場(見張所)があり春になると東の方にも増設される。ここには見張小屋と二本の高い旗竿が立ててある。玄海近傍に出没する鯨は勢美、稚頭、児鯨、長須、真向、錦鯨の各種で見張小屋で鯨を発見すると旗竿に苦(竹であんだむしろ類)がかけられる。かける苦の高さの位置は鯨の発見位置で決

っている。例えば「沖の方」であれば最高位までかかる、さらに勢美鯨の場合には幕がたかれる。この場合はたとえ他の鯨を追っていても勢美鯨にかかるという合図である。この知らせで船団が出帆する。その構成は追船16艘(8挺立ての勢子船で早鈎をもつ)・双海船6艘(8挺立ての網船)・双海附船6艘(8挺立て網船)・持双船4艘(鯨を荷う船)・ちりり船2艘(6挺立て網船)など総数40艘、それにかかわる人数は羽指、水主、納屋人あわせて486人でその外あげ場には敷10人の日雇が集まる。

追船(勢子船ともいう)は船のふちをうちならしながら双海船のはった網代へと鯨を追いこんでいく。鯨が網にかかると一齊に鉛を打ちこむ。鉛には早鈎(長さ2尺柄9寸)、万鉛(長さ4尺、柄一丈)・劍(柄2間)などがある。鉛を打ちこむ人は羽指といい、鯨の弱った所で羽指の一人が海にとびこみ鯨の鼻を切り網を通して。次に手形を切る。これは別の一人の羽指が鯨の脊の潮吹き所に乗りあげここに穴を穿ち網を通すことで、この後さらに鯨の中央部と腰部に網を廻して持双棒に絡め括り。最後の致命の劍を切るのである。鯨は最後の力を絞って荒れ狂い遂に弊死する。弊死した所で持双船は鯨をひいて港に帰る。この間の情景がいつも鮮やかに図説されている。

玄海での捕鯨は近世初頭からといわれ、始めは鉛突法であったが、土井氏時代(1691~1762)から網取法が行なわれており、著者教軒が水野忠任と共に来唐してこの絵図を書いたといわれる頃は、呼子の中尾甚六による鯨組の組織ができて網取法による活動が盛んになっていた頃で、当時の捕鯨法の典型的な技法を知るうえでの図説は貴重なものである。

なおこの後、中尾甚六や唐津の常安九術門らの鯨組は巨万の富を蓄え、その名は大阪まで知られているし、捕鯨は藩の重要な産業の一つとして厚く保護を受けていた。玄海での網取法は日露戦争の前まで続いていた。

(学芸課 尾形善郎)



(鯨捕取走る所)

資料紹介④

近代洋画壇に活躍した人々（その3）

—岡田三郎助—

およそ半世紀にも及ぶながい洋画家としての道を歩み続け、終生変ることのないじめな制作態度を守り続けた岡田三郎助が、のちに、自分がこの道に進んだのは、百武兼行の油絵に心を動かされたからであると述べているのは、まことに興味深い。

また、洋画研究の志を立てた岡田が、はじめに曾山塾へ通いだしたものも同郷の洋画家小代為重の紹介によるものであったし、ラファエル・コランについて外光派流の穏雅な色彩画家としての道を歩みはじめたのも久米桂一郎との知遇によるものであった。すべて同郷の先輩であった。

このように、洋画家としての岡田は、その出発点から、かなり恵まれた環境にあったといえる。穏やかで誠実な人柄は、生涯はほとんど汚されることなく、そのまま、ひたむきな彼の画業のもっとも確かな裏手となっていた。

明治2年1月12日、佐賀市八幡小路に生れた彼は、幼名を石尾芳三郎といい、3歳の時父にともなわれて上京し、19歳で岡田正蔵の養嗣子となった。曾山塾に学び、明治24年に明治美術会会員となり、久米・黒田の帰国後はその薦陶を受けて、29年の白馬会創立に参加、また同年東京美術学校西洋画科の助教授におされ、翌30年5月から39年1月まで文部省留学生としてフランスに留学、コランの門に学んだ。帰国後は、明治40年の第1回文部省美術展覧会（文展）の審査員以来、終生、官展の中心的存在として画壇に活躍する一方、東京美術学校や大正元年設立した本郷絵画研究所等で後進の指導にも力を注ぎ、昭和14年9月23日、71歳で世を去った。

彼の名声が確かなものとなったのは、すでに明治40年のことである。この年第1回文展に先立って行われた東京勵業博覧会に、審査官として出品した「某婦人の肖像」は一等賞を与えられ、また世評もよかつた。

この「某婦人の肖像」は、留学後の彼が、日本的なものの美しさに興味を示した結果生れた独自な画風の一頂点を示す作品であり、彼はこの後、多くの婦人像に力を注いでいる。

挿絵の「花野」もこの一連の婦人像の中から生れた作品であり、大正6年の文展第11回展に出品されたものである。

この絵に見られるように、草木を背景とした戸外の婦人像は、コラン流の優雅な表現の典型でもあった。



「花野」（1917年 油彩 66×91cm）

事実、画面右下の斜め上から見下される草花やモデルの肌は、あくまでも柔かく、また彼女の視線と両の手は、見る者に彼女の清純な恥じらいを感じさせるとともに、甘美で情緒的な雰囲気を画面に与えている。

しかし、それにもかかわらず、この絵には少くとも2つの点から、従来の彼の婦人像との微妙な違いが認められる。ひとつはこの絵のモチーフであり、ひとつは色彩である。「花野」以前の岡田の婦人像は、概して無理のないポーズをとっており、またその肉付け表現もおとなしいのだが、この絵では、対角線上に横たわった裸婦は首と腰のあたりで2回身体をひねっており、また肉付もかっての裸体より豊かに見える。

ここでは、従来の理想的でおとなしい人物描写から、幾分現実的で動きのある女性の姿態を捉えようと思案しており、あわせてモデルの感情の動きをもその現実的描写の中に盛り込もうとしているかのようである。

また色彩においても、裸婦の横にわる花野は濃い緑に彩られていて、コラン流の淡い色調とは異った強い草花の香りを感じさせる。

しかし全体的に見た時、この絵が情緒的な甘さの中に、マニエリズムを思わせるような官能性を幾分感じさせるのは、おそらく彼がひとつの過渡期に入っていることによるのであろう。

ともあれ岡田は、この後濃い色彩による現実的描写を進めていたし、また時には印象派風の筆触で描いたりもした。

しかし、彼の画歴におけるこの変化は、つまりは外光派の写実に基づく変化であり発展でしかなかった。彼は最後まで官展にあって、黒田以来の情緒的で平明な自然描写に生涯を費したのである。

昭和12年、岡田は藤島とともに洋画界を代表して第1回文化勲章を受賞し帝国芸術院会員となった。

画家として、また一人の教育者としての積年の功績にもるものであった。

資料紹介⑤

鍋島藩窯について

—色鍋島更紗文高台皿—

鍋島藩窯は、佐賀本藩の直営企業によるもので、中国、景徳鎮の官窯の組織を多分にとり入れ運営されたといわれており、江戸時代寛永年間から明治4年の廢藩置県まで約250年近く、藩窯として一貫した風格をもち、肥前赤絵の中で、柿右衛門系、吉伊万里系とともに内外の注目をあつめている。

藩窯を時代的にみると、第一期は、寛永5年(1628)～万治3年(1660)まで有田の岩谷川内に創設された。

第二期は、寛文元年(1661)～延宝3年(1675)まで十数年間、南河原山に移窯した。この頃は作調、釉調も安定し、柿右衛門一族の指導と相まって、赤絵も向上し、藩窯の技術的基礎は固められていった。

また有田地方の磁器生産は、大幅に増大し、長崎出島から東南アジア、欧州向けの輸出も盛んになったので、延宝3年(1675)～明治4年(1871)まで、製品の向上と技術漏洩防止のため、幽境、大川内山に移窯して独特の生産が続けられた。(第三期)

原料は、泉山の上等石が使われ、釉薬は底廻し、優秀な技術者を選抜して扶持米を与え、経費を度外視して生産に当たったので、藩窯に従事した人達は、お互に技を磨き、時代の潮流におくれないようデザインに工夫をこらした。

製品は、成型、施釉、採絵について最重な抜が定められ、また窯出し後は、縦密に検査、選別されたので、皿類、鉢類、粗工物等すべて精巧で、少しの重みもなく整い、特に当時の木盃を型どった色鍋島高台皿の美しい曲線は、安定した品格を保ち、藩窯の一つの特色となっている。

絵文様は、藩庁の指示によるものと、江戸時代の木版画の絵手本を見本にしたものが多く、季節のちかつな草木、花鳥などがあり、また宝づくし、桃づくし等写実風でありながら、巧みに図案化して器物に同化させ、色彩の調和美とともに気品をただよわせている。

そのほか、更紗文様も多く、線も色も少しの乱れもなく精巧で発色もよい。

鍋島染付は、四季の草木が主で、呉須の色は鮮明で、地味な落書きをみせているのは、純粹呉須が使われているからであろう。また墨はじきと呼ばれる染付の技法は、規則正しく精密で、青海波などは特に美しい。

大河内山には、青磁鉱があるので、花瓶、香炉、置

物などの鍋島青磁といわれるものがつくられているが、色絵にくらべてその数は少く、色合は割に淡い。また染付と青磁を組合せた染付青磁もつくられている。

藩窯の中で最もよく知られているのは色鍋島といわれるものであろう。

本藩からは陶器方を派遣して、おかかえの直雇の細工人31名を採用して製作に当らせ、赤絵は、内山の赤絵町の中で特に技術のすぐれた赤絵師に委託した。

使われている色の種類は、下絵の染付のほか、赤、黄、緑の三つの上絵具で、たまに黒と紫が使われている。

色鍋島の美しさは、形状の精巧さと、磁肌を充分に生かし、洗練されたデザインと配色の調和美にあります。

今日、伝世されている製品は、そのほとんどが第三期の大河内山で焼成されたものである。

ここに掲載の色鍋島高台皿は、更紗模様の連続で、丹念な線苗と色採の調和は、端然としてゆるみなく、裏文様は染付で力強く栗玉をかき、高台には刻文が整然と並び、藩窯の性格を遺憾なく發揮している。



(色鍋島更紗文高台皿)

(径15.5cm 高 3.5cm 高台径 8.2cm)

(学芸課 久保儀市)

特別企画展紹介

(1) 日本古美術展

期間 9月11日～10月3日

主催 東京国立博物館 佐賀県教育委員会
佐賀県立博物館

東京国立博物館の所蔵になる資料130余件で構成される「日本古美術展」がきたる9月11日から10月3日までの23日間、当佐賀県立博物館で公開展示されることになった。

この日本古美術展は、約5千年前の縄文時代から江戸時代までの絵画・工芸・彫刻など日本美術の代表作を系統的に展示して観賞されるように企画されたものである。

この日本古美術展に出品される資料は132件で、この中に国宝指定の元暦桜本万葉集(11世紀作)など3件、重要文化財指定の法然上人絵伝(14世紀作)・佛形立像(7世紀作)・雪舟の筆による四季山水図など22件、および重要美術品認定の2件が含まれている。

したがって、既に歴史教科書や美術全集などに紹介されている資料も多く、親しみやすく名品と語り合うことができると同時に、わが国の美術の流れを一通りつかむことができ、まさしく千載一遇の好機となるであろう。

展示される主要な名品一覧

- 先史 16件 銅戈鎗范(重文・佐賀市出土)・流水文
銅鐸(重文)・土偶・注口土器・銅劍・銅戈
- 原史 12件 画文帶神獸鏡(国宝)・埴輪・車輪石他
- 有史 6件 玉経(重文)・藏骨器(重文)他
- 法隆寺館 5件 王子形水瓶(重文)・百万塔他
- 絵画 26件 楼閣山水図(応舉筆)・彦山真景図(文星筆)
- 書跡 11件 書状(寛貞筆)・後撰集・大唐西域記(重文)
- 彫刻 4件 伝源賴朝坐像(重文)・枳迦如来坐像他
- 刀剣 18件 太刀銘米国光(国宝)・短刀伝正宗他
- 金工漆工 11件 菩薩半跏思惟像・住吉藤絵額他
- 陶磁 20件 灰釉壺・色絵牡丹文水槽(野々村仁清作)
・茶の湯道具一式他

染織 3件 上代裂帖・赤地梅樹模様正田振袖他

観覧料 (単位 円)

	大人	大・高生	中・小生
個人	180	100	50
団体	150	80	30



（埴輪 男子 古墳時代）



（三鷲紋兵庫領太刀）
（重要文化財 鎌倉時代）



（雪舟筆 四季山水図）
（重要文化財 室町時代）



（与謝蕪村筆
蘭亭曲水図屏風
江戸時代）

<2> 画聖 鉄斎名作展

期 間 10月7日～10月22日

主 催 佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館 日本経済新聞社

わが国の近代日本画壇のなかで一人孤高を守った特異な文人画家、富岡鉄斎（1836～1924）は、近年その作品がアメリカをはじめ海外に紹介されて以来、世界的な視野からあらたな注目をあびてきた。

今日では、深い学識と人格にうらづけられた彼の作品は、その新しい採色や構図によって、むしろ東洋絵画の一つの頂点を示すものであると考えられている。

今秋、当館に出品される100点の遺作は、いづれも鉄斎の長い生涯での代表作ばかりであり、まさに「画聖・鉄斎名作展」の名に恥じない展観である。

これを機会に、日本画壇の枠を越えた鉄斎の高潔な作品を通して、現代の世界美術の中での日本画の位置を、あらためて見直す必要があるだろう。

(主なる出陳品)

富士山圖	1898年	六曲屏風一隻	紙本採色
盧仝喫茶圖	1919年	額 裳	絹本着色
富而不驕圖	1924年	"	紙本淡彩
他 掛軸	69点	屏風 2点	
額装裳	13点	巻子 3点	
余 技	60点		
計	100点		

(観覧料)

(単位 円)

	一 般	大・高生	中・小生
個 人	150	100	50
團 体	120	70	30



<3> 佐賀県児童生徒理科作品展覧会

期 間 9月19日から9月22日 佐賀市理科教育振興会主催

9月24日から9月30日 佐賀県理科教育振興会主催

場 所 佐賀県立博物館 大展示室・中展示室

学校教育の振興を図り、小中高校児童生徒の科学に関する創意的、研究的才能の育成と向上をはかるとともに一般大衆の科学教育に対する理解を深めるために開催される。

種 類 理科的研究物、創作品、製作品

ラジオ、標本等

博物館日誌。

- | | |
|--|---|
| 5月30日 野鳥展開場（中展示室）
四天王寺執事出口正順氏ほか来館 | 6月29日 「有明海・玄海漁撈習俗展」開場（中展示室） |
| 6月1日 茶室「清忠庵」起工式 | 7月2日 高等学校の社会・美術担当者との普及事業に関する懇談会 |
| 6月15日 伊万里市大塚保氏鯨の化石寄贈 | 7月6日 小・中学校の社会・造形担当者との普及事業に関する懇談会 |
| 6月18日 ブラジル大石敏子氏来館・南米産化石寄贈 | 東京国立博物館主任研究官竹内尚次氏来館
「日本古美術展」の展示計画打合せ |
| 6月19日 第1回博物館研究講座「佐賀県の古墳時代とその文化」
講師 本館木下学芸課長 | 7月20日 西有田町「坂の下縄文遺跡展」開場（中展示室） |
| 6月20日 鍋島直泰氏夫妻来館 | 7月21日 県議会文教厚生常任委員本館を視察 |
| 6月23日 河村龍夫氏来館 | |
| 6月26日 昭和46年度第1回博物館協議会 | |

お知らせ

◎常設展

○「佐賀県の歴史と文化展」

期間 9月5日まで

○「坂の下縄文遺跡展」

期間 7月20日から8月31日まで

◎特別展

○日本古美術展

期間 9月11日から10月3日まで

○佐賀県児童生徒理科作品展覧会

期間 9月19日から30日まで

○画聖 鉢斎名作展

期間 10月7日から22日

○第21回県展

期間 10月30日から11月7日まで

○明治、大正、昭和名作美術展

期間 11月15日から28日まで

明治・大正・昭和名作美術展紹介

当展で展覧を予定されている約100点の作品は、日本画、洋画、彫刻、工芸の4部門の明治大正昭和の3代にわたるそれぞれの代表作から厳選されたものである。

明治維新による社会の変革と欧化の前で、わが国の美術界もまた必然的に近代化の道をたどることになった。そのため西洋から移入された洋画は一躍脚光をあげて新しいジャンルを開いたが、日本画もまた、西洋美術に刺激され、たえずその影響を受けながら、新しい変容をとげてきた。彫刻や工芸においても同様である。しかも今日では、あらゆるジャンルの美術が、以前にも増して海外の影響をうけながらも、一方では、わが国の風土の中での独特的な発展を見せていく。

われわれは、近代以来のこのような日本美術の流れを、この展覧を通して正確に理解することができるであろうし、その背景となった近代日本の生き生きとした活力と、文化をさせてきた人々の清新な意欲をも汲みとることができよう。さらにまた個々の名作の鑑賞は、われわれにあらたな感動をよび起すだろう。

博物館報 第3号

発行年月日 昭和46年8月1日

編集 古賀秀男

発行 佐賀市城内一丁目15~23

印刷 佐賀県立博物館

印刷社 佐賀印刷社